

弥生時代と鉄器

Yayoi Period and Iron Implements

春成秀爾

はじめに

① 弥生時代 = 鉄器時代説の生成

② 鉄器の出現と普及

おわりに

[論文要旨]

弥生時代前期から鉄器時代であった、とまったくもつよく主張したのは杉原莊介である。杉原は、1943年、アジア・太平洋戦争中に、弥生文化は農耕と金属をもつ文化であることを強調した。しかし、金属については具体的な資料をほとんど挙げていない。戦争中の米は戦地での食糧、鉄は軍艦・大砲の材料であった。戦いに勝つためには鉄が必要という当時の日本がおかれていた状況を、杉原は自らの意見に無意識のうちに反映させていた。杉原の説はその後1960年代に近藤義郎が継承した。こうして根拠は不十分ながら、弥生前期以来鉄器時代であったとする説は一般化した。そして、1980年代に福岡県曲り田遺跡で鉄器が見つかること、弥生早期から鉄器時代とする考えが広まった。

2002年以来、弥生早～中期の資料の炭素14年代測定を国立歴史民俗博物館の研究グループが集中的におこなった結果、弥生時代の始まりは前10世紀までさかのぼる可能性がでてきた。そこで、弥生早・前期の鉄器についても対応を迫られることになった。筆者はそれらの鉄器の出土状況を検討した結果、弥生早・前期の鉄器はすべて後の時期の鉄器の混入とみなすほかなくなり、弥生早・前期には鉄器は存在しなかったと考えるにいたった。

鉄器は、弥生中期初めないし前葉に鑄造鉄斧またはその破片を再加工した斧、鑿、鉞に始まり、その状態は中期後葉まで存続する。鑄造鉄斧は、2条突帯をもつ中国の戦国時代燕の型式である。燕の文化をよく示す明刀銭が九州・本州にきていないので、鑄造鉄斧の多くは当初から完全品だけでなく破片の形でもたらされたと考えられる。青銅器も同じ時期に普及し始めているので、青銅器あるいはその原材とともに朝鮮半島西南部付近からはいつてきたのであろう。

鍛造鉄器は弥生時代中期後葉に現れる。鍛冶遺構は中期末の例が、福岡、広島、岡山で見ついているから、このころから鉄素材を入手し、鍛冶加工して製品化することが始まったのであろう。魏志倭人伝の記載から、弥生・古墳時代前半期の鉄素材は朝鮮半島南部からもたらされたとする説が有力である。弥生後期のうちに、列島全域で石器が消滅し鉄器が普及しているけれども、これをすべて朝鮮半島南部から供給されたと考えてよいのかの問題は、なお未解決である。

はじめに

2003年5月、弥生早・前期土器に付着していた炭化物の炭素14年代の測定にもとづいて弥生早期の始まりは前10世紀後半、弥生前期の始まりは前9世紀末までさかのぼると発表した[春成ほか2003]。その後、もっとも多くの批判を浴びたのは弥生早・前期に鉄器が存在する事実であって、中国で鉄器が普及するのは戦国時代中・後期であるから、中国よりも早く日本の弥生早・前期に鉄器が出現することはあり得ず、したがって炭素14年代の測定値は間違っているとの反論がつづいた。

それをうけて、弥生時代の年代を決定する鉄器をはじめとする考古資料について、私たちは見直しをおこなった。その結果、弥生早・前期に鉄器が存在することを証明したとされる資料のうち、奈良県唐古遺跡の鹿角製品の鉄銹は誤認、熊本県斎藤山遺跡の鉄斧は再堆積土からの出土、福岡県曲田遺跡の鉄片は出土状況が不明、福岡県今川遺跡の鉄鏃は弥生後期に特徴的な形態をもっているなど、いずれも弥生早・前期に鉄器が存在したと主張するにはあまりにも資料が不確かであって、確実な証拠にもとづくと、鉄器は弥生前期末・中期初めに年代づけられている山口県豊浦町山ノ神遺跡の鉄器が最古例であるとする石川日出志・設楽博己の指摘を引用して述べた[春成2003]。

しかし、山ノ神遺跡の貯蔵穴の底から見つかった鉄器も、弥生前期末だけでなく中期の土器も伴っていることにその後、気づき、前期末と断定することはできないと考えようになった。結局、日本列島に鉄器が現れるのは弥生中期初めないし前半からで、紀元前4世紀後半ないし前3世紀初めというのが筆者の現状認識である[春成2004:20~21]。

そこで、なぜ弥生早・前期から鉄器が存在すると信じられてきたのか、戦前・戦中までさかのぼって研究史をふりかえってみる必要が生じた。また、石器を使っていた弥生人が鉄器をどのようにして入手したのか考えるために、諸外国の状況について調べてみることにした。

①……………弥生時代 = 鉄器時代説の生成

(1) 中山平次郎から小林行雄まで

1917年、中山平次郎は、弥生土器の時代を「金石併用時代」と規定しようと提唱した[中山1917]。しかし、このばあいの金属器は青銅器を指していた。

1932年、山内清男は、弥生時代に鉄器もほぼ同時に使用されているけれども、この時代は新石器時代後期に属し、鉄器が一般化し石器が用いられなくなった古墳時代から鉄器時代と理解すべきである、と考えた[山内1932(1967:22~25)]。しかし、弥生時代の鉄器の実例についてはいっさいあげていない。

1934年、中山平次郎は福岡県飯塚市立岩運動場遺跡の甕棺から出土した鉄剣を「金石併用時代の遺物」として報告し、銅矛・銅剣と同時代に鉄器が存在したことを指摘した[中山1934:29~35]。

1935年、森本六爾は、「弥生式前期と末期との間には、鉄器の一般化をもって、鈍い乍ら境をして居りますのは注意すべきこととあります」と述べている〔森本 1935: 49〕。しかし、弥生時代の鉄器の出土は稀有であったために、それ以上の追究はなかった。

1942年、福岡県飯塚市鶴三緒遺跡で発掘した「小形竹篋状鉄器」と、筑穂町北古賀遺跡で採集した「石庖丁形鉄器」を弥生時代の鉄器として森貞次郎が報告した〔森 1942: 380～381〕。後者は、のちに原田大六によって現代の犁の金具の誤認と看破され、原田と連名で撤回した資料である〔原田・森 1961〕。森は、この論文で1) 石庖丁に見られる金属穿孔、2) 扁平石斧の消失、3) 木器の整形に見られる金属器使用の切り口、を根拠にして鉄器の存在を考えている。そして、「鉄器は遺存に適さない」ので発見は稀であるけれども、「扁平石斧を喪失した博多海岸平野の須玖式文化は、銅矛、銅剣によって代表される青銅器文化であると共にまた実に鉄器文化であったと言い得る」と主張した〔森 1942: 384・386～387〕。磨製石斧の消長にもとづいて、「姿なき」鉄器を想定する思考方式は、このころ始まったのである。

弥生文化が農耕をおこない金属器をもっている段階にあることを明らかにしたのは、1937年の奈良県唐古遺跡の発掘調査である。1943年刊行の報告書で、小林行雄は、弥生文化の当初から青銅と鉄の利器が存在したことを論じている。その根拠は1) 鉄錆が付着した刀子の把がある、2) 木製容器の修理に銅針を使用している、3) 木製容器の仕上げに鉄製工具の使用が考えられる、4) 青銅器を模倣した武器形木製品がある、であった。しかし、金属器の使用は、轆轤を使って木製容器を製作する時に鉄製刀子で削るなど極限されており、主体は石斧類であったと考えている〔小林・末永 1943: 244〕。

この考えは、1951年の『日本考古学概説』に継承され、木製耕具を製作する工具は磨製石斧類であって、「弥生式文化では木器が農耕具などとして石器と相並んで用いられたので、その工具としての石斧の分化発達も、前代に比して著しいものがあつた」と述べた〔小林 1951: 104〕。その一方、「前期に属する遺品（木製容器……H）をとって見ても、単に轆轤が用いられているというのみでなく、これを削る刃物が金属器であったと認める以外に考えようのない、精巧な仕上げのものが少なくない」と指摘した〔同前: 122〕。

小林の最終的な考えは、1959年刊の『図解考古学辞典』に示されている。小林は弥生時代を「ほぼ前2世紀」に始まると推定し、「この時代は日本における金属器使用の開始期にあたるので、青銅器および鉄器をふくめた初期金属文化としての様相を呈している」と述べていた〔小林 1959: 980〕。

(2) 杉原荘介から近藤義郎へ

唐古遺跡の調査結果をうけて、弥生文化の特徴が「農耕・鉄器文化」であることを力説したのは、杉原荘介であった。

杉原は1943年に『原史学序論』を著し（図1左）、「日本の金属文化として正確に考へられるのは鉄器文化に於てである。此の文化に就いては、反って我が国のそれは相当に優秀性を誇るに足るものであつた。此の時代に於ても石器は併び行はれたのであるが、然しそれは膨張する文化力に金属器の生産が相伴はぬ場合に於てであつた。又、この金属器の存在は其処に優秀なる木器の存在を

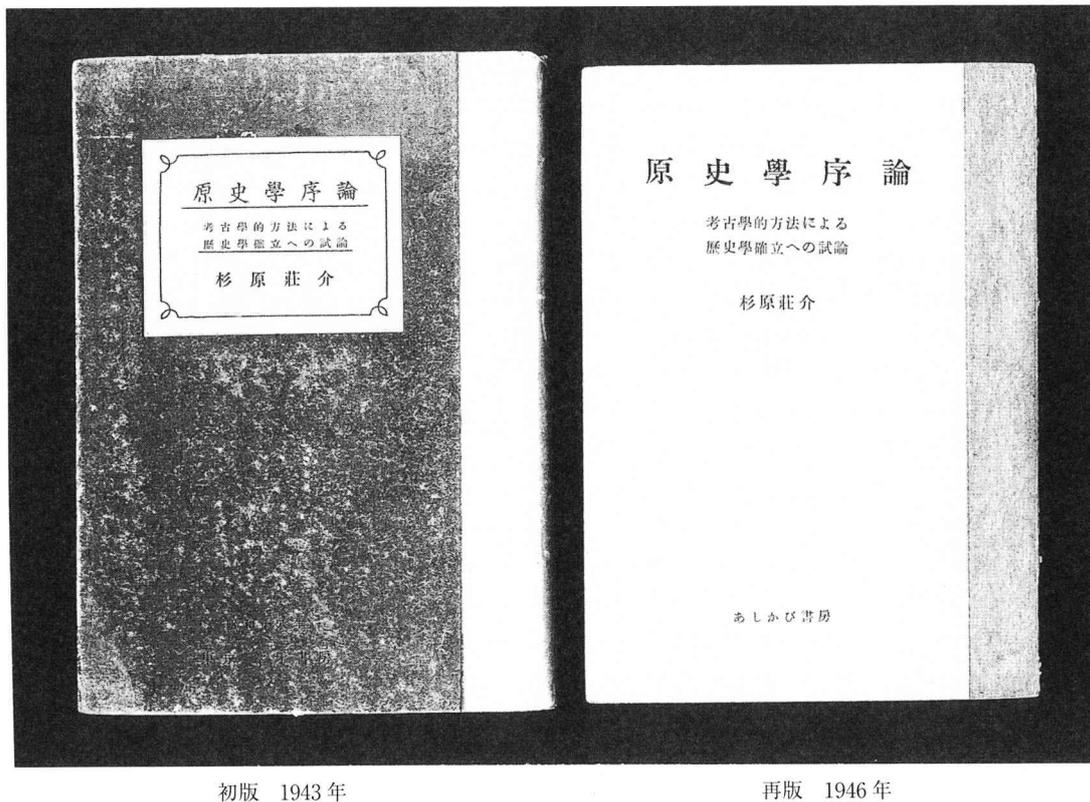


図1 杉原莊介『原史学序論』の表紙

約束するのであるが、今日に於ては、或る特殊の遺跡にそれが残存していたことより、実際に於て証明づけられている。此の文化の最も大きな特性は水田耕作を主体とせる農耕文化である」と高らかに提唱した [杉原 1943: 190]。杉原の考えを単純化すると、金属器を補うものとして石器が存在することになり、小林行雄とは反対の理解である。

しかし、鉄器の具体的な資料としては、中山が報告した「須玖期」の甕棺に鉄剣が副葬されていた例にふれているだけである。にもかかわらず、「銅器に次いで、直に鉄器が輸入せられていたことが解る」と書いている [同前: 201 ~ 202]。杉原は弥生時代の鉄器の実態についてほとんど示すことがないまま、「それは相当に優秀性を誇るに足るものであった」と断言し、古墳時代の鉄器を「殊に我が国の鉄器文化として他に誇ることの出来るものも多い」とまで記述している。

杉原はこの著書の「自序」に「此の現代は歴史家と雖も客観を許されない所の現代である」と述べ、「結論」に、「世界の歴史は古く、国また幾つ興亡を重ねたるかは知らねど、今日世界戦争の主導性を把握し、歴史表裏に活躍している国は何程。歴史の古きこと、決して其の国家の優秀なるを物語るものではないが、さりとして日本のごときに燦たる歴史の持続を示していること、また偶然に於いては得られない一大事実である。果たせるかな、その歴史の淵源を尋ねて見れば、其れはまこと理由のあるを知るのである」と述べ、日本歴史を讃美する言辞を連ねている [同前: 230 ~ 231]。

杉原は、戦後ただちに『原史学序論』の一部を書き直して再版を上梓している (図1右) [杉原 1946]。そこでは、杉原の歴史観を述べた初版の自序と結論の部分は削除されていた。しかし、弥

生時代の「鉄器文化」は「相当に優秀性を誇るに足るものであった」の文言は再版にも生き残っていた〔杉原 1946：210〕。

戦後5年たち、日本の社会も少し落ち着きを取り戻してきた1950年、杉原は、唐古遺跡の木器から鉄器の存在を推定し、福岡県鶴三緒遺跡の石包丁形鉄器が下伊田式土器（弥生前期後半）に伴出したといい、弥生文化は「当初より鉄器文化であつたらしく、また農業も、この文化をまっけて始めて明瞭に発生する」。「すなわち前時代の石器の器具の使用や、狩猟・漁撈生活に対して、鉄器の使用や農耕生活という文化の革命をみるのであつて、縄文文化と弥生文化の間に引かるべき一線は、世界の一般の文化変遷の上にも見られない太い線である」と強調している〔杉原 1950：3〕。鉄器と農耕の存在をもって弥生文化を縄文文化から区別するこの論文は、その後には杉原が発表する弥生文化論の原型になった。

杉原は1955年の『日本考古学講座』4でも、弥生前期の奈良県唐古、大阪府瓜破遺跡から鉄器使用による木製品が出土し、その直前の時期の福岡市板付遺跡でも「直接的な資料はないが、当然に鉄器は使用されていたと思われる。すなわち、弥生文化とともに鉄器は出現」しており、弥生文化は「すでに鉄器時代に属している」との主張を繰り返した〔杉原 1955：3, 25〕。

1951年から1958年までの8年間、日本考古学協会の「弥生式土器文化総合研究特別委員会」の研究代表者を務めた杉原は、その間の調査と自らの研究を総括した。この論文で、杉原は福岡市板付遺跡で溝の壁面についていた「金属製の器具によって掘鑿されたのではないかと思われる刃跡」に注意していたところ、熊本県斎藤山遺跡から「ついに鉄器を発見することができた」ことによって、「板付式土器の時期から、すなわち弥生時代の当初から鉄器が使用されていたのだということ」を了解した。おそらく、新文化の移入とともにもたらされたものであろう。弥生時代の開始されたことは、また日本において金属器時代が始まったことを意味する」と弥生時代の当初から鉄器時代であったとする持論をあらためて提示した〔杉原 1961：18〕。なお、「青銅器が日本に最初にもたらされたのは、鉄器より遅れ、中期に至ってからである」と述べ、鉄器と青銅器が日本列島に出現する前後関係についての所見を明らかにした〔同前：31〕。

事例の少なかった鉄器の問題に光明をもたらしたのは、長崎県壱岐の原ノ辻、加良香美の両遺跡から弥生中期末の豊富な鉄器を発掘した1956年の岡崎敬の報告であった〔岡崎 1956〕。岡崎は、原ノ辻遺跡出土の板状の鉄を素材と考え、魏志倭人伝を援用して弥生時代中・後期の日本列島の鉄器の材料は朝鮮半島からもたらされたことを具体的に論じていた。

弥生文化を「農耕・鉄器の文化」と規定した杉原莊介の説を普及させたのが、近藤義郎であった。近藤は岡崎の報告をうけて1957年、弥生前期から発達している木製農耕具の製作に鉄器の存在が不可欠であることを強調した〔近藤 1957：7～8〕。

1960年、杉原が編集した『世界考古学大系』の弥生時代の巻に、近藤は弥生時代の鉄器に関する体系的な記述を初めておこない、新しい資料を盛り込んで小林-杉原の弥生時代=鉄器時代説をさらに補強した〔近藤 1960a・b〕。

大陸系磨製石斧類は用途に応じた機能的分化をもっていたが、「鋭度、細部加工の点で限界があつた。その限界をこえるものは金属器である。」しかし、金属器の「遺存する事例はきわめてまれである。」その理由は、「鍛鉄のものがたいそう腐朽しやすいということのほか、破損しても捨て

ずに、ふたたび打ち返してべつの鉄器として再生させたことにもよるのである。したがって、石器の消長との関連において、あるていど鉄器の有無のていどを推察する方法が可能とされる」と近藤はこの論文で主張した。

近藤は、奈良県唐古遺跡で弥生前期に金属製の工具・利器を使用した可能性を説く小林説を引用し、その後の発見品として、熊本県斎藤山遺跡の「鍛造」鉄斧と宮崎市櫛遺跡の石庖丁形鉄器をあげ、さらに福岡市板付遺跡の溝の掘穿に鉄器使用の痕跡を考える杉原の意見を紹介し（櫛遺跡の鉄器は、のちに原田大六が現代の犁の金具の一部の誤認と指摘した北古賀のものと同じである）、「弥生前期に金属製利器とくに鉄製品が存在し使用されたことは、もはやほとんど動かせないようにおもわれる」と述べた〔近藤 1960a: 35～36〕。近藤の論は、鍛冶加工が弥生前期以来存在していたことに通じるものであったけれども、その点は十分に意識されていなかった。また、弥生前期の木工具・耕作具が木製の鋤・鋤であること、鉄器は木製品の細部加工を中心に威力を発揮したことを強調しながら、板付遺跡の溝の掘削に鉄器の使用を認めることは矛盾していた。

近藤は1962年に「弥生文化論」を発表した〔近藤 1962〕。この論文では、「弥生文化はすでに成立のはじめから、水稻耕作・金属器・大陸系磨製石器群・織物技術など新しい各種の文化要素をそなえている」ことは、既定の事実であった。弥生文化成立当初から鉄器の普及を考えたのは、弥生文化の成立を紀元前2、3世紀の中国の戦国時代末期から秦漢初頭に中国東北部から北朝鮮に「燕・斉の亡民」などを契機に「農耕金属文化が広がりつつあった」時期に求めていたこととも関連していた〔同前: 144～145〕。この論文は、考古資料にもとづいて弥生文化の成立から農業共同体の変貌、地域的統一集団の成立まで、社会構造の変化を主テーマに論じた、これまでにない斬新な内容から、杉原の次の世代の研究者に大きな影響を与え、弥生時代の全期間を「農耕・鉄器の文化」とする説は、ゆるぎないものとなった。

(3) 弥生時代＝鉄器時代説の原点

以上のように、弥生時代の当初から鉄器時代であったとする考えは、杉原荘介に始まり、ニュアンスを違えながら近藤によって継承され、普及した。いま、注意すべきことは、杉原の一貫した主張の原点というべき最初の論考は、1943年12月に杉原が出征する直前に校了になり、戦争中に刊行された著書に見えるという事実である。鉄は大砲・軍艦の材料、米は戦地での食糧として、戦争の遂行に欠かせない物資であり、国家・国民にとって絶えず意識のなかにあった。戦時中、「日本文化の発生」と「国家の成立」を弥生文化のなかに性急に求めようとした結果、根拠は薄弱であったにもかかわらず、杉原は弥生時代を鉄器時代と規定した。そこに、時代の影をみてとることも可能であろう。

全国的な視野をもち1950年代の弥生文化研究を牽引した杉原の言動が日本の考古学に与えた影響は大きいものがあつた。そして、1960－1970年代の弥生時代研究は近藤義郎がリードした。小林行雄から杉原荘介が受けつぎ、さらに肥大化した「農耕・鉄器の文化」説は、近藤というよき継承者を得て定着した。

弥生時代の年代測定結果をうけて、筆者らが弥生前期の鉄器の信憑性について検討するようになる前の状況、「鉄の壁」はこのようにしてできあがった。

その後の大きな出来事は、福岡市板付遺跡で縄文晩期の突帯文土器単純期（夜臼Ⅰ式～夜臼Ⅱa式）の水田跡が発掘され〔山崎 1979, 1987〕、佐賀県唐津市菜畑遺跡でも同時期とされる水田跡が見つかった。これらの遺跡だけでなく、福岡県二丈町曲り田遺跡でも突帯文土器単純期に大陸系磨製石器群を伴う事実が明らかになった。さらに、曲り田遺跡では鍛造の鉄器片も伴出したと報告された〔橋口編 1984: 423〕。水田稲作と鉄器をもつ突帯文土器単純期は「弥生早期」と呼んで、弥生時代の上限をさかのぼらせ、弥生前期は前 2, 3 世紀, 弥生早期は前 4, 5 世紀という推定がごく自然に定着した。

その一方、橋口達也は甕棺の型式を細分し、1 型式に 30 年の時間幅を考え、前漢鏡の型式によって実年代を与えることが可能な甕棺型式から 30 年づつさかのぼっていく方法を示して、弥生中期の始まりを前 180 年前後、弥生前期の始まりを前 300 年前後と考えた〔橋口編 1979: 197〕。そして、その前に弥生早期を置いて、その始まりを前 400 年前後と推定した〔橋口 1985: 103〕。曲り田遺跡の鉄器については鍛造品とみなし、中国南部の楚とのかかわりを想定し〔橋口 1995: 22〕、それによって、弥生早期の年代を燕の鑄造鉄器の年代から解放させようとしていた。

弥生早期の曲り田遺跡の鉄器を承認するならば、その上限は当然、中国での鉄器の普及年代という歯止めがかかる。筆者はその鉄器を燕との関係でとらえ、弥生早期を戦国後期、前 4～3 世紀の年代と考えていた〔春成 1990: 17〕。

その一方、1980 年代から弥生中・後期の鑄造鉄器の資料が増えてきた。そうした状況をふまえて 1992 年に野島永は、日本列島の初期の鉄器は鑄造鉄斧の破片を再加工した例がほとんどすべてであることを指摘し、列島の鉄器の歴史が鑄造鉄器片の再利用から鍛造鉄器へと変遷する案を提出し、ようやく鉄器の歴史がみえてきた〔野島 1992〕。また、村上恭通は、増加してきた弥生時代の鍛冶遺構に関する 20 遺跡の情報を集成し、鍛冶は中期後葉ないし中期末に始まることを明らかにした〔村上 1994b〕。

しかし、福岡県曲り田、熊本県斎藤山遺跡の鉄器の存在は、日本列島における鉄器の歴史の始まりの部分をかきわめて理解困難なものにしていた。1999 年に刊行された村上恭通の労作『鉄と倭人の考古学』でも、弥生早・前期の鉄器の叙述が明快でないものになっているのは、他の研究者の発掘報告の内容を疑うことを夢想だにしない、あるいは不謹慎とする考古学界の雰囲気の中なかではやむを得ないことであった。

しかし、一方では曲り田の鉄器の存在を否定することなく弥生早期の年代を前 6, 5 世紀、前期の初めを前 5, 4 世紀まで遡上させる武末純一のような立場もあった〔武末 2002: 3〕。

2002 年以来、弥生早・前期の資料の炭素 14 年代測定を集中的におこなった結果、弥生時代の始まりは前 10 世紀までさかのぼる可能性がでてきた。そこで、批判が集中したのは、弥生早・前期の鉄器の扱いであった。中国戦国時代の鉄器の歴史からすると、日本列島に鉄器が現れるのは前 300 年が上限であるという議論であった。弥生早・前期の鉄器への対応を迫られることになった筆者は、奈良県唐古、熊本県斎藤山、福岡県今川、同県曲り田遺跡の鉄器関係資料を再検討した結果、弥生早・前期の鉄器は誤認と後の時期の鉄器の混入であり、鉄製工具によって加工された弥生早・前期とされる佐賀県菜畑遺跡などの木製品についてはその時期比定に問題があるともみなすほかなくなり、弥生早・前期には鉄器は存在しなかったと考えるにいたった〔春成 2003, 2004a: 156～158, 2004b: 156～158〕。

2004b : 20 ~ 21]。

②……………鉄器の出現と普及

(1) 弥生時代の鉄器の上限

現在、日本列島で最古の鉄器と確かにいえるものはすべて鑄造品であって、そのいずれも鑄造鉄斧の破片を再加工した例である(図2-3~11)。そして、弥生中期初めないし前葉といえる時期の鉄器は、福岡県北九州市中伏遺跡の2点と熊本県上高橋高田遺跡の1点をあげることができるほどにすぎない[春成2004:21]。

その後の資料で注目すべきは愛媛県小松町大久保遺跡の溝や袋状貯蔵穴などから出土した20点の鑄造鉄器である。いずれも3~5cmの小破片で、元は鉄斧の2条の突帯(節帯)、身、側縁などの破片と判断できるもので、なかには一端を研磨して斧や鑿に再加工したものもある[柴田・田本2000、宮崎2001]。問題は伴出した土器の型式と年代であって、調査者は、「弥生前期末から中期前半(伊予東部第Ⅱ様式)」に属するという。これを細かくみていくと、遺存度の悪い前期末の溝から見つかったという1点を除くと、のこりの16点は中期初め3点、中期前葉7点、中期初め~前葉6点、中期中頃1点となっている。「1回の発見」で判断した過去の苦い経験を肝に銘じて一モンテリウスの言にしたがって「30回以上になると確実」とまではいわないけれども一より多くの確実な資料の集積をまって鉄器の出現が弥生前期末までさかのぼるかどうかが決定すべきであろう。この遺跡の「前期末」とされる鉄器は1点にすぎない状況では、「中期前半」の土器に鑄造鉄斧の再加工品が伴ったという以上のことはいえない。

弥生時代の鉄器が豊富にのこっていた佐賀県吉野ヶ里遺跡では、出土した71点の鉄器のうち弥生中期前半のものは鑄造鉄斧の破片を再加工した鑿1点だけで、他は中期後半の鍛造の鑿が1点、のこりはすべて後期に属するものであった[村上1992:382~397]。

鳥取市(旧、青谷町)青谷上寺地遺跡からも、鑄造鉄器が14点発掘されている。それらは「弥生前期末から中期前葉」のものが1点あるほかは、弥生中期中頃~後葉が4点、中期後葉が2点、後期が2点、後期~古墳初頭が4点である[高尾2002:234~237]。この遺跡でも、最古例は弥生中期前葉と考えるのが無難であって、鑄造鉄斧の多くは中期中頃以降に中心があると理解するのが穏当であろう。

かつて村上恭通は弥生時代の鑄造鉄斧とその破片の再加工品を集成し、中期初め4点、中期前半5点、中期中頃5点、後半8点、中期末2点で、中期いっぱいにとまっていることを明らかにした[村上1994:73]。青谷上寺地遺跡の資料を加えると、いっそうその傾向がはっきりしてきたといえるだろう。

弥生時代の鑄造鉄斧は、袋部に2条突帯をもち、刃部に向かって幅がわずかにせまくなる特徴をもっている。2条突帯をもつ鉄斧はこれまで次の遺跡から見つかっている。

- 1 福岡県北九州市中伏 中期初め
- 2 福岡県福岡市比恵 中期後半(やや古い) 完形品

- 3 福岡県朝倉町上の原 中期中頃
- 4 福岡県北九州市下稗田 前期後半～中期中頃 一部欠損
- 5 福岡県添田町庄原 中期中頃
- 6 愛媛県小松町大久保 前期末～中期前葉
- 7 島根県松江市西川津 中期
- 8 鳥取県鳥取市青谷上寺地 中期中頃～古墳初め 3点

このように2条突帯をもつ鉄斧は中期初め～中期後半までの間つづいて見られる（ここでは前期後半・末の年代は採用しない）。

鑄造鉄器が大陸からもたらされたことは明らかであるから、朝鮮半島・中国東北地方における鉄器の始まりの状況についてみよう。

韓国の青銅器時代（無文土器時代）の墓では、銅剣・銅戈・銅矛に最初のうちは青銅の斧・鑿が伴い、のちに鑄造の鉄斧・鉄鑿に置き換わっており、その境界はひじょうにはっきりしている。鑄造の鉄斧・鉄鑿が現れるのは、忠清南道合松里、同素素里、全羅北道南陽里の時期である。鉄斧の袋部は素縁で2条の突帯をもつ例はない。合松里遺跡の墓からは2個見つかったので、2個一

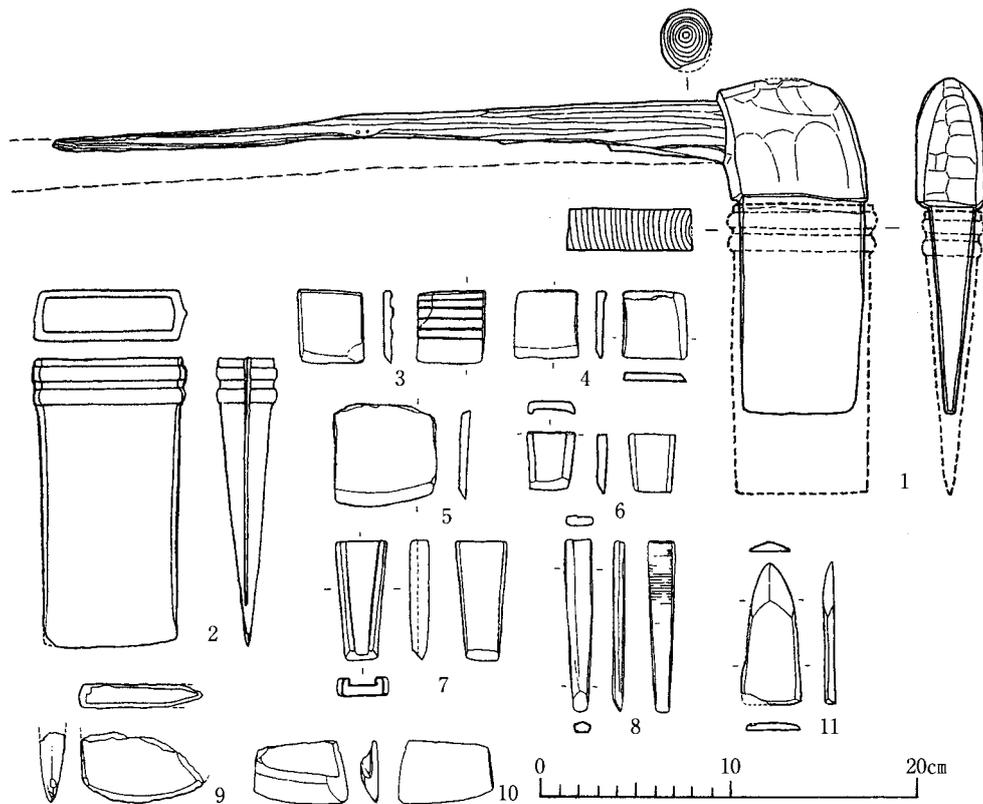


図2 弥生中期の鉄器と斧柄 [村上 1994a, 橋本編 2003] から作成

1 鑄造鉄斧の柄（石川・八日市地方）と着装復原, 2 鉄斧完形品（福岡・比恵）, 3～5 再加工鉄斧（3 福岡・庄原, 4・5 福岡・下稗田）, 6～8 再加工鉄鑿（6 熊本・神水, 7 佐賀・吉野ヶ里, 8 大阪・鬼虎川）, 9・10 再加工鉄斧（9 福岡・中伏, 10 熊本・上高橋高田）, 11 再加工鉄鉈（福岡・上野原）

対で副葬されたとみられ、そこで大田付近出土の農耕画青銅器（防牌形銅器）の絵で畝を作っている男が片足をかけて踏み込んでいる二股鋤の鉄刃先と比較し、これらは、実は鉄斧ではなく二股鋤つまりタビの刃先とも考えられている〔東・田中 1973: 42, 村上 1994: 79～82〕。さらに、この時期にはガラスの管玉を伴うのが特徴である。合松里遺跡や素素里遺跡出土のガラスの管玉は佐賀県吉野ヶ里遺跡の南墳丘墓 SJ1002 号甕棺（中期後半、立岩式）から出土した一鑄式有柄銅剣とともに出土した例と同じである。

ところが、この時期の朝鮮半島南部の鑄造鉄斧で、袋部に2条突帯をもつ例は慶尚北道慶山市林堂洞遺跡の墓から副葬品が1点知られているだけである。その一方、2条突帯をもつ鑄造鉄斧は中国東北部の河北省易県燕下都遺跡から戦国後期の例が見つかっている。この遺跡からは突帯をもたない鉄斧すなわちタビも出土している。遼寧省では撫順市蓮華堡、寛甸県双山子、建平県河東、吉林省では梨樹県二龍湖、内モンゴルでは赤峰市老虎山、北朝鮮では平安北道寧平郡細竹里、咸鏡北道会寧郡五洞遺跡から2条突帯の鉄斧が出土している（図3）〔村上 1988: 8, 10〕。このように、2条突帯の鉄斧の分布が朝鮮半島の付け根を南に超える例はきわめて稀である。弥生時代の鉄斧の起源は、朝鮮半島ではなく中国東北部の燕国の領域に求めるべきであろう〔村上 1994: 80〕。

弥生遺跡と燕下都遺跡から出土した2条突帯をもつ「鉄斧」は、弥生時代中期前半～後半の時期は燕すなわち戦国時代中・後期と併行することを示唆している。現状では、日本列島における鉄器使用の開始期は、弥生中期前葉、炭素年代の較正年代では前4世紀末～前3世紀にあるとみてまちがいないと筆者は考える。日本・朝鮮半島とも鉄器がこの時期をどのていどさかのぼるかの検討がこれから必要であろう。

なお、鉄器は使用すると刃部の損耗によって切れ味が悪くなるので、砥石で絶えず研いで刃部を再生しなければならない。したがって、鉄器を使うところでは必ず砥石が伴うと考えるべきであるから、今後は鉄器用の砥石の出現時期や出土数に対する注意も必要である。

(2) 鉄箍交易

弥生時代の鉄器は、弥生人が鉄鉱石や砂鉄を精錬して素材を得て製品化したものではない。大陸からもたらされた鑄造鉄斧の破片を研磨して斧、鑿、鉋などに再生していたのが最初の姿であった。では、彼らはどのようにして鉄斧の破片を入手したのであろうか。時代も地域もまったく異なるけれども、石製や貝殻製の斧を使っていた太平洋諸島の人々が鉄器を手に入れる様子を実物と文献にあたって調べ参考にした。

ハワイの原住民たちは18世紀後半まで石斧や貝斧で家を造り、舟を作っていた。彼らのあいだに鉄器がはいってきたのは、18世紀後半のことである。鉄器は、ヨーロッパから渡来した人たちから鉄箍^{たが}の破片や鉄釘を得て、加工したものであった（図4）〔Summers 1999: 58～61〕。すなわち、ヨーロッパ人から樽の鉄箍を適当な長さに切断した破片を入手し、その一端を研いで刃をつけた斧がある。斧の柄の形状は石斧のばあいと異なるところはない。私が見た鉄箍の1例は、幅5cm、厚さ2mmである。さらに、ヨーロッパ船の太い鉄釘の先端を砥石で研いで刃をつけた鑿がある。

1767年にポリネシアのタヒティ島を最初に訪れたヨーロッパ船のイギリス軍艦ドルフィン号（ウォリス艦長）は鉄釘などの鉄製品をもってきて島民たちと物々交換をおこなっている。

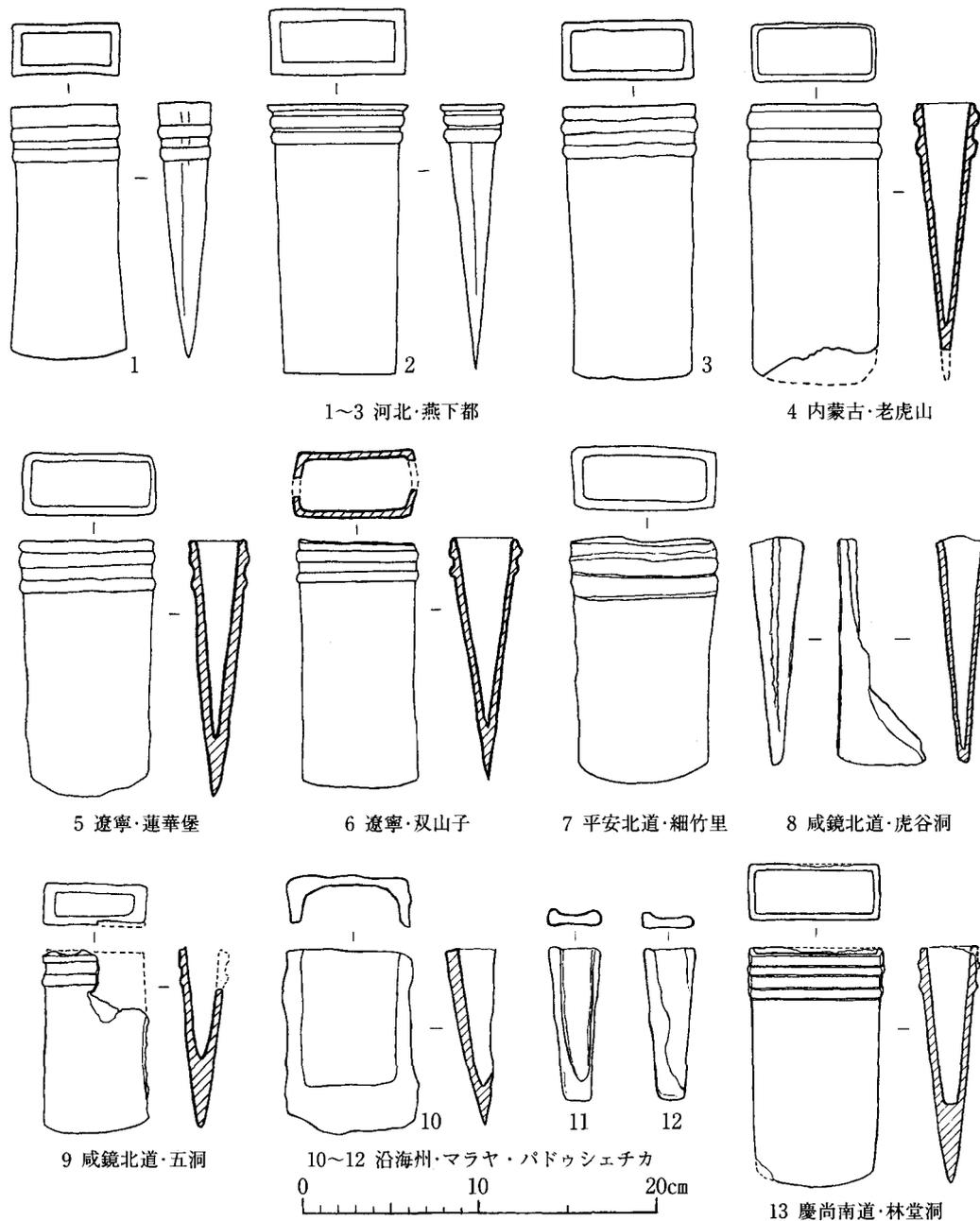


図3 東アジア出土の2条突帯をもつ鑄造鉄斧 [村上1988, 野島1992] ほかから作成

1769年にエンデヴァー号に乗って第1回の太平洋探検の航海に出たキャプテン・クックは、タヒティ島の原住民と交易するさいに、「すべての種類の鉄、鉄製品、ないしはすべての種類の布地およびあらゆる必需品は、糧食以外のものとの交易に用いてはならない」という規則を船員に守るよう命令している。各人がめいめい勝手に取引をおこなって原住民との間に混乱や争いを引き起こさないようにするための予防措置である [クック (増田訳 1992: 64~65)]。

クックは、原住民が貴重品扱いする手斧を2人の首長に贈っている。また、豚やパンの実などをももらったお返しに、手斧やリンネル布などを与えている [同前: 66, 69, 73, 74~75]。また、40kg

くらいの重さの豚を1頭売りに来た者たちは、ただひたすらに、大工用の幅広の鉄斧との交換を望んだ。2年前にはどんな種類の斧よりも大釘を欲しがった同じ人々が、斧の使い方をおぼえたので、手斧以下の品物では、4.5ないし5.5kgの豚を手放そうとはしない。それどころか、小さい、低い質の斧などほとんど眼中になく、また15.5g、31gの小さな釘、または62g以下の釘などまったく無価値と考えるようになったことを記している〔同前：74～75〕。その後、手斧1個で「女王」オバリアから豚1頭を入手している〔同前：79〕。原住民たちは、2年前にドルフィン号が来たさいに入手した鉄斧の修理と、鉄片で斧を作ることを要求している。鉄片が「ほしいとなると、彼らはどんな種類の盗みの手を使ってでもそれを手に入れる」とクックは嘆いている〔同前：88〕。実際に、夜になると原住民達は鍛冶場に侵入したり、鉄籠でとめた水樽や鉄の火掻き棒を盗んだりしている〔同前：89～90、95〕。

クックは1773年の第2回探検のとき、トンガ諸島に寄った。彼が見た唯一の鉄器は、小さな釘で作った錐のような道具だけで、石、骨、貝殻を材料にした道具を使っていた。彼らは鉄の有用性を知っていたので、ビーズ玉などよりも釘を好んだ。クックらは原住民とバナナ、ココヤシ、ヤムイモ、豚、鶏を手に入れるのに鉄釘と布を与えている。また、鉄斧は首長への贈り物をするときや、豚を手に入れるときに特に有効に使っている〔クック（増田訳1994：119）〕。原住民たちは鉄斧の価値がよくわかると、鉄斧を欲するようになっていく。クックが首長にシャツ1枚、斧1個、赤い布一切れ、望遠鏡1個、メダルとビーズ玉少しを与えた結果、クックが受け取った返礼は約20籠の焼いたバナナ、パンの実、ヤムイモ、約9kgの重さの豚1頭であった〔同前：134～135〕。クックらはトンガ諸島に6日間滞在している間に、斧、釘、布切れなどを交換物にして、豚50頭、それに倍する鶏、積み込めるかぎりのバナナとココヤシ、少量のヤムイモを補給している。ニュージーランドでは、原住民たちは大きな釘を特に欲しがり、クックらの所有物のなかでもっとも貴重品であるように扱った〔同前：158～159〕。

クックは1776～79年の第3回探検のとき、太平洋の島々のまだ石器を使っている住民と交流し、友好と協力の関係を結ぶために用いる鉄器具や小物資を多数積んで出帆している〔クック（増田訳2005：18）〕。そして、タスマニア、ニュージーランド、トンガ、タヒチ、北アメリカのヌートカ・サウンドなどを経てハワイ島に寄り、そこで悲劇的な最期を迎えている。

1804年にロシアのナデジュダ号は世界一周の航海の途中、マルケサス（マルキーズ）諸島のヌクヒヴァ島に寄っており、その時の様子を船長のクルーゼンシュテルンは記録している。彼によれば、原住民は鉄斧をもっとも欲しがったが、これは豚にたいしてだけ交換し、その他のばあいは古い鉄籠の小片を用いている。長さ10～13cmの切片1個でココナツ5個またはパンノキの実3、4個と交換したという。薪水補給作業の労賃もこれで払い、ボート1回分で鉄籠の切片1ダース以下であった。

同船には日本の漂流民たちが同乗しており、日本帰国後に大槻玄沢・志村弘強が幕府の命をうけて彼等から聴書を作り1806年に『環海異聞』を著している。そこには、「水樽の鉄籠のはなれたる物を、先達で船中鍛冶に断ち切らせ置しもの数多あり、是を……此程づつ出し与へければ、鯉一尾に交易して、其鉄を手にとりささげて泳ぎ帰り、如何なる珍宝を得しごとく悦ぶ様子なり」とあり、さらに「女人を舟へあげ、試みに水夫等をして奸淫せしめ、聊か物を与へ給へ、左あらば人気和らぎて何事も

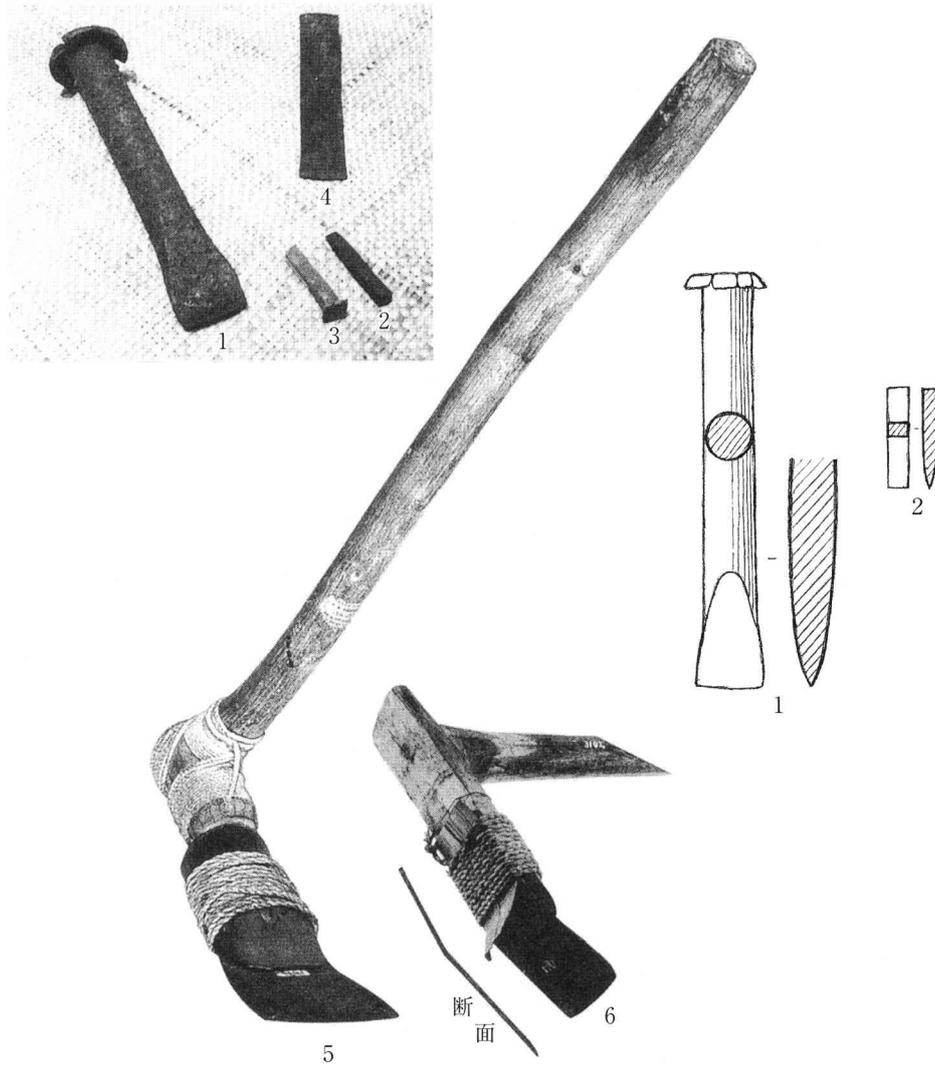


図4 ハワイの初期鉄器

1・2・3 鉄釘製のノミ, 4 鉄箍製のノミ, 5・6 鉄箍製の斧身 (1~4 春成原図, 5・6 [Summers1999])



図5 ヌクヒヴァ島での船上の出来事

フランスの探検家デュルヴィユがヌクヒヴァ島を訪ねた時に船に乗ってきたマルケサス人の女性たち [Snow and Waine1979] → [高山1991]

自由なるべしと教へたり。此言に随ひ、使節は知らぬ顔にて、上役の者心得、水夫ともに内通し、教のごとく取扱せ、其賃として鉄籠の折れ少しづつ取らせければ、大ひに悦び持帰りたり」という記述がみられる〔石川 1992: 80〕。鉄片を入手するのに島民の男たちは妻や娘を差し出すことを積極的におこなっている。人類学者はこれを「売春貿易」と呼んでいる(図5)〔同前: 78~82〕。クルーゼンシュテルンはまた、船に訪ねてきた首長にブラジル・オウムと鉄製まさかりを贈り、返礼として豚をもらっている。

フィジー島では、1824年にスペインのラウリセ号で乗組員が反乱を起こして船長らが殺害された。そのとき、フィジー人は船を解体して鉄を手に入れたという〔高山 1993: 177〕。

ギルバート諸島(現、キリバス諸島)の19世紀頃の遺跡で、高山純らは鉄製の籠で作ったナイフを発掘している(図6)〔高山 1991: 51〕。ナイフの1点は、長さ22cm、幅4cmほどの大きさで、その幅は籠の幅と一致しているようである。

パラウ島では『異国江漂流仕奥州南部之者七人口書』によって、18世紀の様子をうかがうことができる。それによれば、「小刀や鑿のような鉄器」があるほか、『ペラホ物語』によるとマニラから来た商船から鉄の斧などの刃物がいってきている。しかし、丸木舟は貝斧や石斧で作るのが普通であった〔高山 1993: 95〕。1791年に同島に到着したイギリスの東インド会社のパンサー号(マックリュアー船長)とエンデヴァー号(ドラモンド船長、のちプロクター船長)が、島民のために運んできた品々のなかに「金属器、砥石、円匙、鋸」が含まれていた〔同前: 201〕。

パラウ諸島の一つのトビ島を1834年に訪れたアメリカのブリターニヤ号(ショート船長)の船員は、島民に世話になったお礼として鉄片をいくつか与えている。また、1835年には軍艦ヴィンセンズ号のオーリック艦長が、アメリカ人の人質解放との交換に鋏、手斧、鑿、ドゥローナイフなどの鉄製品を差し出している〔同前: 214~216〕。

19世紀の台湾では、鉄片から皮なめし用の搔器をつくっていることを鹿野忠雄が報告している(図7)〔鹿野 1942: 125~127〕。鉄片は長さ12.5cm、幅3cm余、厚さの薄いもので、形状は片刃の鉋状を呈している。原材料が何であったかはわからない。原住民の説明によれば、鉄片を使う以前は「片刃石斧」であったという。

これらはいずれも鍛造の鉄製品の破片を砥石で研磨加工しており、熱を加える作業を欠いている。石器を鉄器に置き換えるさいに柄などの形態にも大きな変化はない。石器時代から鉄器時代への移行にさいして、周辺の鉄器文化の担い手から鉄籠の破片や鉄釘を入手して磨製石器を作る技術で鉄器を作る「鉄籠交易」が一つの型として存在すると考えてよいだろう。

(3) 鉄斧交易

鉄器の普及には、当然のことながら、他の型もある。

1964年にニューギニアの西イリアン中央高地を調査した石毛直道の報告〔石毛 1978〕によると、ニューギニア高地では20世紀まで石斧・石ナイフの時代がつづいた。そこへヨーロッパ人が鉄斧や鉄ナイフをもたらした。ここでの鉄斧が完全品であるのは、宣教師や探検家をもたらしたもので、太平洋を大型帆船に乗って航海する探検隊とは交易の規模が小さく、宣教師らが計算高くもなかったからであろう。石毛は、「石器時代にあった人びとがまずとびつく外部文明の産物は鉄器で

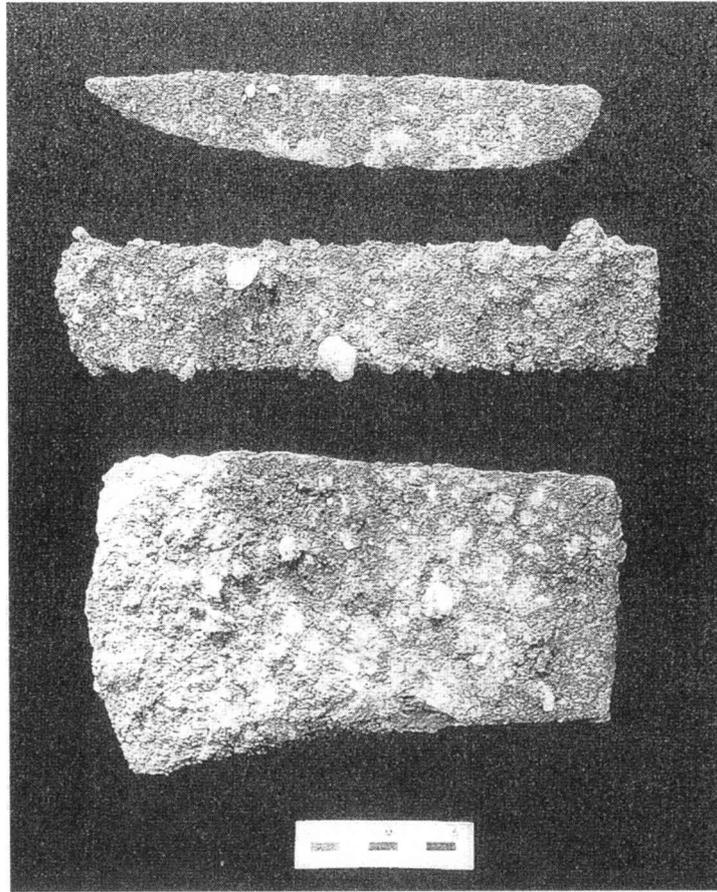


図6 キリバス諸島の鉄箍で作ったナイフと斧 [高山 1991]

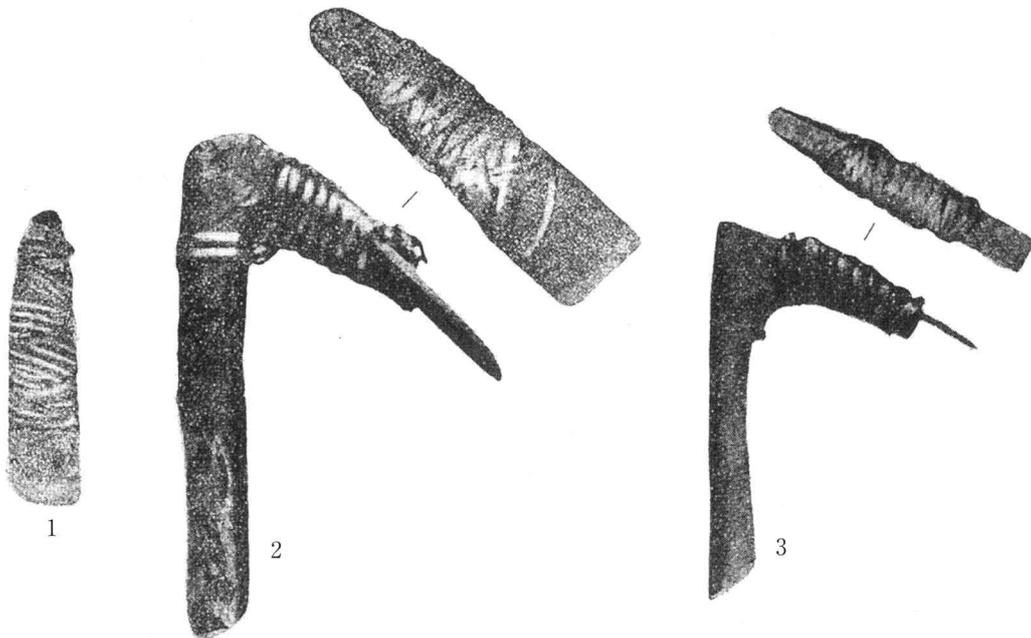


図7 台湾原住民ツォウ族の鉄片を刃にした生皮掻き取り具 [鹿野 1942]

あり、それも鉄斧がまず求められ、鉄ナイフはそのつぎの段階に普及する」と述べている。鉄ナイフは、刃渡りが20cm 程度の匕首状をしており鋏で木柄にとめている。石毛らとともに調査した本多勝一らは、柄をつけた石斧と木を伐採するための大きな鉄鋸をかついだ男に出会っている（図8）〔本多 1973：67～83〕。

ニューギニアのシアネの住民たちのばあい、鉄斧の「伝播の方法は、最初は儀礼的な交換によってであり、まず、その地その地のビッグマン（長老）たちの手に入った。ビッグマンたちは、それを実際の作業にも交換にも用いた。ビッグマンが複数の鉄斧を所有し始めると、人々がそれを借りて使うことも始まった」という〔佐原 1994：57〕。

20世紀のオーストラリアのイル・イオロント族のばあいも、白人たちから鉄斧を入手している。クックの時代の探検船であれば、鉄箍や鉄釘であったのだろうが、時代が変わったのである。

これらの「鉄斧交易」で得た鉄斧のばあいも、使用によって傷んだ刃を再生するのは、砥石で再研磨するだけであって、鍛冶加工の技術はもっていない。



図8 ニューギニア高地での石斧と鉄鋸の共存〔本多 1973〕

大林太良は19世紀後半までさかんに行われていたインドシナ半島の奴隷貿易について言及し、奴隷と鉄鋌との交換のばあいがあることを紹介している〔大林1983：356〕。

オホーツク文化の墓（8～9世紀）に副葬されている「蝦夷の蕨手刀」は、出土数こそ本州東北地方がもっとも多いけれども、奈良時代の西日本で作ったものが移入されたと考えられている〔佐原1985（2005：134）〕。擦文文化（5～12世紀）の人たちの間では、斧、刀子、鋤・鍬先・鎌などの鉄器は本州の東北地方から交易によって製品を移入したと推定されている〔石附1983、笹田2004〕。鉄器の種類・形態に北海道独特のものはない。擦文文化後期に入ると、遺跡から鍛冶遺構が見つかり、鉄滓や鞆の土製羽口が出土するので、鍛冶加工を行っていたことは確実視されている。

17世紀のアイヌは鉄輪や鉄斧など鉄をもっとも欲しい物資としていたことを、1643年に歯舞、国後、ウルップ島、十勝を訪れたオランダ船のキャプテン・フリースは記録している。彼らは精錬し鍛冶加工する技術をもっており、マキリ、鎌、斧、庖丁など鋼製品を作っていたと推定されている〔深澤1998：48～50〕。

琉球では、貝塚時代後期から6、7世紀にゴホウラやイモガイの貝殻を貴重財としていた九州から鉄斧などがごく少量はいつてきたという。7世紀の奄美では、マツノト遺跡やサウチ遺跡での鞆の羽口が見つかったので、この頃に鉄器の生産が始まったと考えられている。しかし、沖縄ではまだ鉄器を作った痕跡は見つかっていない。10世紀に日本本土でヤコウガイを使った螺鈿の製作が始まると、その材料となるヤコウガイを多産する沖縄が日本や中国から重要視されるようになった。また、仏具の材料としてやはり沖縄のホラガイが貴重視された。こうして、12世紀頃まで貝殻を代償にして沖縄に鉄器がもたらされたと推定されている〔木下編2002：16～19、130～137〕。その一方、10～12世紀頃の沖縄では、中国船から（あるいは日本船からも？）鉄釘を入手して、鑿などに再加工しており、鉄斧の完形品が流入するようになったのは、13世紀頃に農業生産力の高まりを基盤にグスクが築かれ、その支配者と中国商人や日本商人との接触が始まってからのことである、という（安里進教示）。

(4) 弥生中期の鉄斧片の流通形態

弥生時代の鉄器の上限を弥生中期初めないし前半とすれば、炭素14年代の較正年代では前4世紀中頃～前3世紀前半が上限ということになる。年代的には中国の戦国時代中期～後期初めである。弥生時代と同様の鑄造鉄斧片を再加工した鑿は、沿海州のヤンコフスキー文化のマラヤ・パドゥシェチカ遺跡（図3-10～12）、クロウノフカ文化のアレニ（マイヘ）遺跡、アムール河下流域のポリツェI遺跡からも出土しており〔野島1992：27～28、村上1992：476～473〕、この時代の中国周辺地域での一つのあり方を示している。弥生人はどのようにして鉄斧あるいはその破片を手に入れたのであろうか。

戦国時代の「富商大賈」は大規模な製鉄事業をおこない、東アジア各地に販路を広げていたと影山剛は考えている〔影山1984：4～8〕。影山の説を都出比呂志は敷衍し、中国から商人が日本列島に直接来たか、あるいは朝鮮半島の集団を媒介して中国東北部の鉄器が弥生人の手に渡った可能性を考えた〔都出1991：34〕。

それに対して村上恭通は、弥生前半期の鑄造鉄器がすべて中国製であるという確証がないとして

意見を保留した〔村上 1992：479〕。しかし、その後、鑄造鉄斧の破片の出土例が増加し、それらは基部に2条突帯をもつこと、側面中軸線に甲張りをのこす合範を用いて鑄造した戦国時代の燕に特徴的な型式であった。それに対して、朝鮮製は単範を用いて鑄造しており、甲張りは片側に寄っていることが判明した。その結果、弥生中期前半～中頃の鑄造鉄斧は中国製、弥生中期後半～後期に朝鮮製がはいっていることが考えられるようになった〔村上 1999：20～23〕。

弥生中期初めないし前半の鑄造鉄器は、いずれも鉄斧の小破片を研磨加工したものであって、商人が持ち歩くようなものではない。もちろん、鉄斧の完全品がもたらされ、使用によって破損したものを再加工した可能性も否定はできないだろう。

しかし、これまで知られている鉄斧の完全品は、福岡市比恵遺跡 SK201 出土例が「須玖Ⅱ式古段階」すなわち弥生中期後半とされている（図2-2）〔白井編 1996：37・40・45〕。その一方、袋部をもつ鑄造鉄斧の完全品を装着していたと考えてよい形状をもつ木製柄（図2-19）6点が出土した石川県小松市八日市地方遺跡は、弥生中期中頃～後半である〔橋本 2003：295～298〕。同じく、鑄造鉄斧用の組み合わせ式の木製柄を出土した佐賀県三田川町吉野ヶ里遺跡第 275 調査区 SD0322 溝跡は、弥生後期前半までくだる〔七田編 2003：52〕。

こうしてみると、弥生中期初め～中頃つまり戦国中期中頃～後期に、主として鑄造鉄斧の破片がはいってきて、弥生中期中頃つまり戦国後期頃に完全品がはいってきたという鑄造鉄器流入の二つの段階を設定することもできるだろう。

では、弥生中期中頃の鑄造鉄斧の完全品は、戦国時代の商人が日本列島まで携えて来たのであろうか。戦国時代の燕国の人々が活動したあとにのこされているのは、燕の明刀銭であって、その量も1遺跡1、2枚ではなく、数十枚から数百枚、ときとしては数千枚（4000枚、5000枚という例がある）に達する大量の埋蔵銭としてのこされている例が普通である。また、戦国時代の商人が商品として鉄斧の完全品をもたらしたとすれば、明刀銭のほかに燕の他の文物ももちこんでいるはずである。ところが、明刀銭を出土した遺跡の分布は、大同江上流、清川江上流、大寧江上流、鴨緑江上流の朝鮮半島西北部の山間地帯までであって（図9）〔藤田 1938（1948：283）、木下 2000：188、田村 2001〕、朝鮮半島の基部を越えることすらない。鑄造鉄器流入の二つの段階を想定したとしても、戦国時代の商人がかかわって日本列島に鉄器がもたらされたとする考えには無理があろう。

今回の弥生時代の実年代について再考する過程で、弥生時代の青銅器の一定量の搬入および鑄造もまた、中期初め以降と考えたほうがよくなってきた。福岡県福津市（旧津屋崎町）今川遺跡の銅鏃と銅鏝は、弥生前期の板付Ⅰ式に属する例外的な資料であるが、朝鮮半島の遼寧式銅劍の小破片を再生したものにすぎない。また、和歌山県御坊市堅田遺跡の銅鉈の鑄型は、近畿の弥生前期末に属するので、従来の考えでは北部九州に先立って近畿で青銅器の鑄造がおこなわれていたことになるけれども、北部九州の中期初めの最初と近畿の前期末の最後とは時間的に重なる可能性があり、速断はできない。

弥生中期初め～前葉の鉄器は、小破片を再加工して製作することが習いになっている感がつよい。弥生中期の鑄造鉄器は、最初は破片として、青銅器または青銅器の原材とともにもたらされたと考えたほうがよいのではないだろうか。そう考えてよければ、そのあり方は、18～19世紀の太平洋諸島に鉄釘や鉄箍がもたらされ、それを再加工して鉄器が広がっていった「鉄箍交易」の状況を彷彿

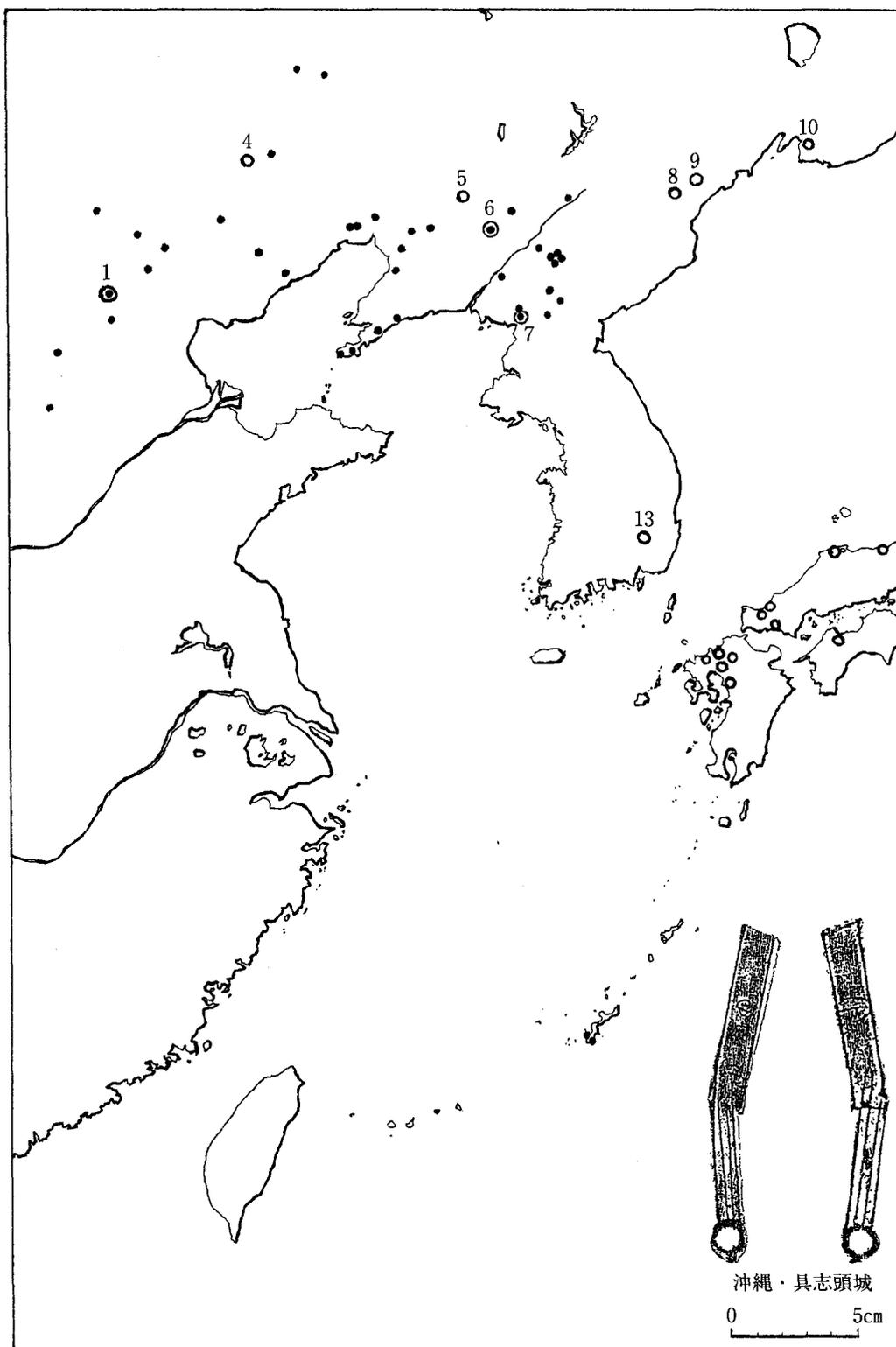


図9 鑄造鉄斧とその破片○、明刀銭●の分布

[木下 2000] に 2 条突帯をもつ鑄造鉄斧の出土地を記入。数字は図 3 に対応。

佛とさせるものがある。

鉄斧、鉄鑿、鉄鉋などの鍛造鉄器は弥生中期後葉に現れる。鍛冶遺構は中期末の例が、福岡、広島、岡山で見つかっているから、このころから鉄素材を入手し、鍛冶加工し製品化することが始まったのであろう [村上 1994b]。魏志倭人伝の記載から、弥生中期末～古墳時代前半期の鉄素材は朝鮮半島南部 (弁辰) からもたらされたとする説が有力である。弥生後期のうちに、列島全域で石器が消滅し鉄器が普及したことが考えられているけれども、これをすべて朝鮮半島南部から供給されたと考えてよいのかの問題は未解決である。

おわりに

中国では新石器時代にすでに大規模な土木工事をおこなっている。仰韶文化 (前 5000 年紀) の陝西省半坡遺跡の弓状に長さ約 300m 余りのこっていた環壕は、断面が V 字形で上部幅 6～8m、底部幅 1～3m、深さは 5～6m に達する。集落を土壁で囲った新石器時代の囲壁集落は、各地に現れている。

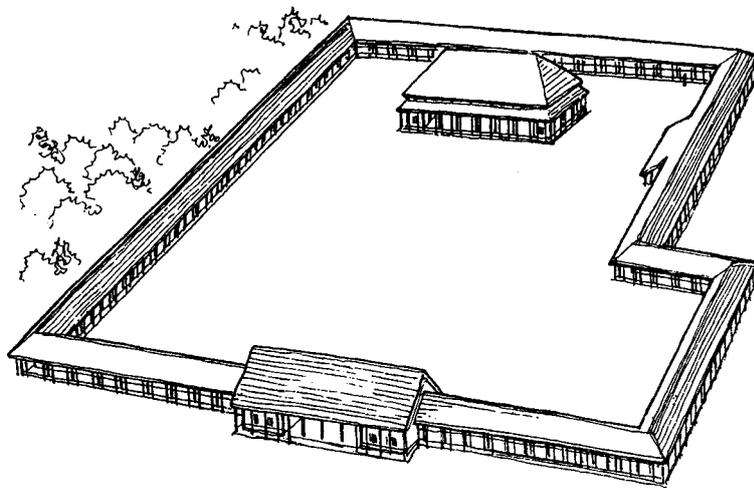
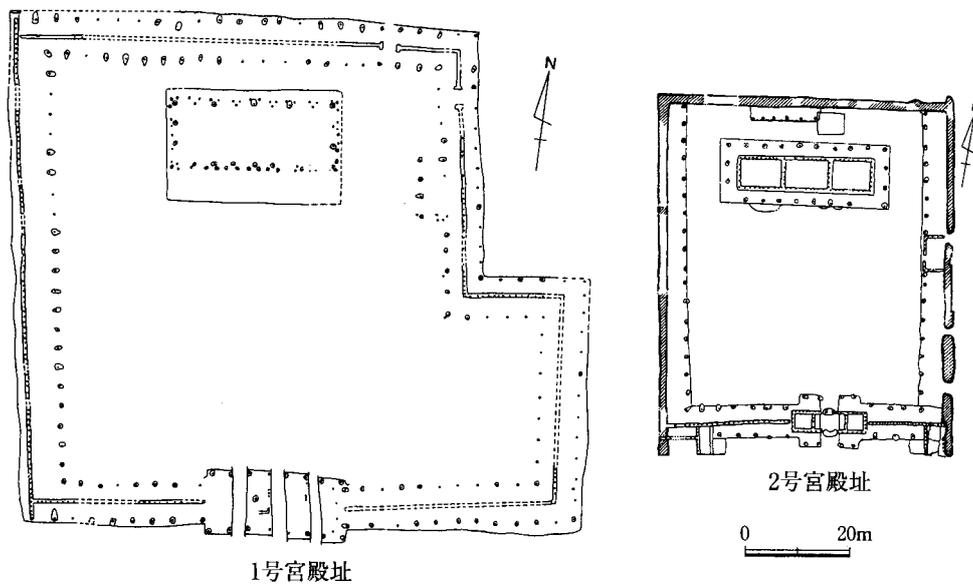
湖北・湖南地方の屈家嶺文化 (前 3000 年紀前半) の湖北省石家河遺跡の囲壁集落は隅丸方形で、南北 1200m、東西 1100m、土築の囲壁の幅は底部 50m、頂部 8～10m、高さ 6～8m 以上、囲壁の外側に幅 60～100m の壕をめぐらせた壮大な規模を有する。

山東龍山文化 (前 3000 年紀後半) に属し古くから知られている山東省城子崖遺跡の囲壁集落は南北最大長 530m、東西 430m、囲壁の上幅 8m、下幅 13m、高さ推定 6m、同じく山西省東下馮遺跡の環壕集落も南北 130m、東西 125m、内壕の幅 5.5m、深さ 3.5m、外壕の幅 3.5m、深さ 3m をもっている。龍山文化の時期には銅製品はすでに現れているが、鈴、装身具が主で、しかもその量もわずかであって、土木具は石鋸・石鋤で、工具は伐採・加工用の石斧と切削用の石鑿、それに骨角製の楔がある。この状態は次の二里頭文化 (前 2000 年紀前半)、つまり夏代までつづく。

二里頭文化 3 期の河南省二里頭遺跡は夏王朝の都宮跡と推定され、1 号宮殿は南北 100m、東西 110m の回廊をめぐらせた宮域の北辺近くに 30m × 11m の木造宮殿、南辺に南大門を建てていた (図 10)。同じく 2 号宮殿は南北 73m、東西 58m の宮域に、木柱土壁をもつ宮殿、南辺に南大門があった。この時期には、斧、鑿、錐、鋸の銅製品の存在が知られているけれども、その金属成分は銅 98%、錫 1% であって、これで石斧より効率的な木工を可能にする鋭利な刃が得られたのか、はなはだ疑わしい。各種の銅工具が出現したとはいえ、生活や生産の場ではまだ主要には石器が用いられていた [岡村 2003: 124～130]。出土品から判断すると新石器時代の宮殿と考えるほかない。

同じことは北アメリカ北西海岸の原住民の住居やトーテムポールについてもいえる。赤杉 (レッド・シダー) の大木を使ってトーテムポールや巨大家屋を建て、精巧な木製品を作っているが、鉄器導入以前においては石斧、石槌と楔を使って赤杉の大木から大きな板材を得たあと、石斧 (手斧) と石鑿・ビーヴァーの切歯で作った鑿を用いてさらに加工を行っていた [Cirk 1986, Stewart 1995]。

かつて東北地方の亀ヶ岡式の時期の木製品をみて、考古学研究者は金属器使用の可能性をごく自然に考えた [杉山 1930: 25～27, 芹沢 1960: 171～173]。しかし、世界史的にみれば石器で精巧な木製品を作り、大型の木造建物を建てており、金属器の使用は大型木材加工の前提となるものでは



1号宮殿の想定復元（楊鴻勛による）

図10 新石器時代（夏代二里頭3期）二里頭遺跡の宮殿 [岡村 2003]

決してなかった。そのことは、縄文前期以来の木製品や大型建物跡が豊富に見つかっている現在では容易に納得しうることであろう。

炭素14年代による弥生時代の実年代を見直し作業が進み、従来の説と大きく齟齬をきたす問題に取り組んできた結果、弥生時代の鉄器の歴史がはっきりみえてきた。弥生早・前期には灌漑施設をもつ水田で稲作を始めているけれども、鉄器はまだ存在せず、弥生中期にいたってもなお鉄器の普及度は低い。鉄器時代といえるようになったのは、弥生中期末から後期のことであると訂正せざるを得なくなるだろう。石器を使って木製の土木具や農耕具を作り、木を伐ったあと水田を拓き、木製や石製の土木具で環濠を掘削し、石器で大きな建物を建てるのが充分できたのである。このようなことがわかってきたのも、炭素14年代効果の大きな成果である。

文献

- 東 潮・田中俊明 1988『韓国の古代遺跡』1新羅編, 中央公論社。
- 石川栄吉 1992『日本人のオセアニア発見』平凡社。
- 石毛直道 1978『西イリアン中央高地の石器』(加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編)『社会 文化 人類』219～270頁, 中央公論社。
- 石附喜三男 1983『エゾ地の鉄』『稲と鉄』日本民俗文化大系3, 301～321頁, 小学館。
- 大林太良 1983『争いと戦い』『稲と鉄』日本民俗文化大系3, 335～382頁, 小学館。
- 岡崎 敬 1956『日本における初期鉄製品の問題』『考古学雑誌』第42巻第1号, 14～29頁(岡崎敬/春成秀爾編2003『魏志倭人伝の考古学』対馬・壱岐篇, 218～243頁, 第一書房, 所収)。
- 岡村秀典 2003『夏王朝—王権誕生の考古学』講談社。
- 影山 剛 1984『中国古代の商工業と専売制』東京大学出版会。
- 鹿野忠雄 1942『台湾原住民族の生皮搔取具と片刃石斧の用途』『人類学雑誌』第57巻第3号, 123～131頁。
- 木下尚子 2000『銭貨からみた琉球列島の交流史』『古代文化』第52巻第3号, 185～193頁。
- 木下尚子編 2002『先史琉球の生業と交易』平成11～13年度科学研究費補助金研究成果報告書, 熊本大学文学部。
- クック 1768～1780(ビーグルホール・J.C.編 1955～1967, 増田義郎訳 1992・1994)『太平洋探検』上・下, 17・18世紀大旅行記叢書3・4, 岩波書店。
- クック 1768～1780(ビーグルホール・J.C.編 1955～1967, 増田義郎訳 2005)『クック 太平洋探検』5・6, 岩波文庫485, 岩波書店。
- 国立中央博物館編 1992『特別展 韓国青銅器文化』汎友社。
- 小林行雄 1938『弥生式文化』『日本文化史大系』1, 原始文化, 214～253頁, 誠文堂新光社。
- 1951『日本考古学概説』創元選書218, 創元社。
- 1959『やよいしきーじだいーぶんか』(水野清一・小林行雄編)『図解考古学辞典』980～982頁, 創元社。
- 小林行雄・末永雅雄 1943『後論』『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告, 第16冊, 232～252頁, 桑名文屋堂。
- 近藤義郎 1957『初期水稻農業の技術的達成について』『私たちの考古学』第4巻第3号, 2～12頁。
- 1960a『鉄製工具の出現』『世界考古学大系』2, 日本Ⅱ, 弥生時代, 34～41頁, 平凡社。
- 1960b『農具のはじまり』『世界考古学大系』2, 日本Ⅱ, 弥生時代, 42～51頁, 平凡社。
- 1962『弥生文化論』『岩波講座日本歴史』1, 原始および古代1, 139～188頁, 岩波書店。
- 1966『弥生文化の発達と社会関係の変化』『日本の考古学』Ⅲ, 442～459頁, 河出書房新社。
- 笹田朋孝 2004『金属器文化の普及』(野村崇・宇田川洋編)『擦文・アイヌ文化』新・北海道の古代3, 70～85頁, 北海道新聞社。
- 佐原 真 1985『分布論』『岩波講座日本考古学』1, 研究の方法, 115～160頁, 岩波書店(佐原2005『考古学への案内』佐原真の仕事1, 98～154頁, 岩波書店)。
- 1994『斧の文化史』UP考古学選書6, 東京大学出版会。
- 七田忠昭編 2003『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書, 第156集。
- 柴田昌兎・田本克彦 2000『大久保遺跡』『愛比売』平成11年度年報, 13～16頁, 愛媛県埋蔵文化財調査センター。
- 白井克也編 1996『比恵遺跡群21—第51次調査の報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書, 第452集。
- 杉原荘介 1943『原史学序論』葦牙書房。
- 1946『原史学序論』あしかび書房。
- 1950『古代前期の文化』新日本史講座, 古代前期, 中央公論社。
- 1955『弥生文化』『日本考古学講座』4, 弥生文化, 2～30頁, 河出書房。
- 1960『農業の発生と文化の変革』『世界考古学大系』2, 日本Ⅱ, 弥生時代, 1～13頁, 平凡社。
- 1961『日本農耕文化の生成』『日本農耕文化の生成』本文篇, 3～33頁, 東京堂。
- 杉山壽榮男 1930『石器時代有機質遺物の研究概報—特に「是川泥炭層出土品」に就て—』『史前学雑誌』第2巻第4号, 255～277頁。
- 芹沢長介 1960『石器時代の日本』築地書館。
- 高尾浩司 2002『鉄器』『青谷上寺地遺跡4』本文編1, 234～254頁, 鳥取県教育文化財団。
- 高山 純 1991『南太平洋の民族誌—江戸時代日本漂流民のみた世界—』雄山閣出版。
- 1993『江戸時代パラウ漂流記』三一書房。
- 武末純一 2002『弥生の村』日本史リブレット3, 山川出版社。

- 田村晃一 2001「楽浪郡設置前夜の考古学—清川江以北の明刀銭出土遺跡の再検討—」『楽浪と高句麗』25～58頁, 同成社。
- 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』第343号, 5～39頁。
- 中村慎一編 2001『東アジアの囲壁・環濠集落』考古学資料集25, 金沢大学考古学研究室。
- 中山平次郎 1917「九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て」『考古学雑誌』第7巻第10号, 595～632頁, 第11号, 667～700頁, 第8巻第2号, 16～41頁, 第3号, 129～161頁。
- 1934「飯塚市立岩運動場発見の甕棺内遺物」『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第9輯, 1～55頁。
- 野島 永 1992「破碎した鑄造鉄斧」『たたら研究』第32・33号, 20～30頁。
- 橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI, 中巻, 福岡県教育委員会。
- 1995「弥生文化成立期における東アジアの動向」(金関恕+大阪府立弥生文化博物館編)『弥生文化の成立』角川選書265, 12～23頁, 角川書店。
- 橋口達也編 1984『石崎曲り田遺跡Ⅱ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告9, 福岡県教育委員会。
- 1985『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告11, 福岡県教育委員会。
- 橋本正博 2003「木製品」『八日市地方遺跡Ⅰ』第2分冊, 遺物報告編, 285～484頁, 小松市教育委員会。
- 濱田耕作 1930『東亜文明の黎明』刀江書院。
- 1935「日本原始文化」『岩波講座日本歴史』岩波書店。
- 原田大六・森貞次郎 1961「九州出土石庖丁形鉄器の撤回」『考古学研究』第7巻第4号, 25～34頁。
- 春成秀爾 1990『弥生時代の始まり』UP考古学選書11, 東京大学出版会。
- 2003「弥生早・前期の鉄器問題」『考古学研究』第50巻第3号, 11～17頁。
- 2004a「日本の青銅器文化と東アジア」『国立歴史民俗博物館研究報告』第119集, 31～49頁。
- 2004b「炭素14年代と鉄器」(春成秀爾・今村峯雄編)『弥生時代の実年代』148～160頁, 学生社。
- 2004c「弥生時代の年代推定」『季刊考古学』第88号, 17～22頁。
- 春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本 稔 2003「弥生時代の開始年代—¹⁴C年代の測定結果について—」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』65～68頁。
- 春成秀爾・今村峯雄編 2004『弥生時代の実年代』学生社。
- 深澤百合子 1998「17世紀沙流川流域アイヌ文化の鋼製造技術」『北海道考古学』第34輯, 43～61頁。
- 藤田亮策 1938「朝鮮発見の明刀銭と其遺蹟」『史学論叢』第7輯, 岩波書店(藤田1948『朝鮮考古学研究』196～292頁, 高桐書院, 所収)。
- 本多勝一 1973『ニューギニア高地人』本多勝一著作集3, すずさわ書店。
- 宮崎雅延 2001「大久保遺跡」『愛比売』平成12年度年報, 15～16頁, 愛媛県埋蔵文化財調査センター。
- 村上恭通 1988「東アジアの二種の鑄造鉄斧をめぐって」『たたら研究』第29号, 1～20頁。
- 1992「吉野ヶ里遺跡における弥生時代の鉄製品」『吉野ヶ里』本文編, 佐賀県文化財調査報告書, 第113集, 471～481頁。
- 1994a「弥生時代中期以前の鑄造鉄斧」『先史学・考古学論究』71～85頁, 龍田考古会。
- 1994b「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第41巻第3号, 60～87頁。
- 1999『鉄と倭人の考古学』青木書店。
- 2001「古墳出現前夜の「地域性」」『考古学研究』第48巻第3号, 20～40頁。
- 2003「中国・朝鮮半島における鉄器の普及と弥生時代の年代」『考古学ジャーナル』第510号, 17～20頁。
- 森貞次郎 1942「古期弥生式文化期に於ける立岩文化期の意義」『古代文化』第13巻第7号, 357～395頁。
- 森本六爾 1935『考古学』歴史教育講座, 四海書房。
- 山崎純男 1979『板付遺跡調査概報(板付周辺遺跡(5)1997～1998年度)』福岡市埋蔵文化財調査報告, 第49集。
- 1987「北部九州における初期水田」『九州文化史研究所紀要』第32号, 127～186頁, 九州大学文学部。
- 山内清男 1932「日本遠古之文化」『ドルメン』第1巻第8号, 60～63頁, 岡書院。
- 1967『日本遠古之文化』山内清男・先史考古学論文集・第1冊, 先史考古学会。

Cirk, R. 1986 *Tradition & Change on the Northwest Coast*. University of Washington Press, Seattle.

Stewart, H. 1995 *Cedar*. University of Washington Press, Seattle.

Summers, C.C. 1999 *Material Culture : The J.S.Emerson Collection of Hawaian Artifacts*. Bishop Museum Press, Honolulu.

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2005年10月29日受理, 2006年8月10日審査終了)

Yayoi Period and Iron Implements

HARUNARI Hideji

It was Sosuke Sugihara who has most strenuously asserted that the age after Early Yayoi was an age of iron implements. In 1943, during the Second World War in Asia and the Pacific, Sugihara stressed that the Yayoi culture was a culture rice cultivation and metals. However, he provided scarcely any specific data on metals. During the war, rice served as food on the battlefields and iron served as a material for making warships and artillery. Sugihara unconsciously reflected in his own opinion Japan's situation at that time, which required iron for it to be victorious. This theory of Sugihara's was passed on to Yoshiro Kondo in the 1960s. It was in this way that the theory that the age of iron in Japan began after Early Yayoi gained general acceptance, even though there were insufficient grounds. Then, when in the 1980s iron implements were found at the Magarita site in Fukuoka Prefecture, the belief that the Iron Age began in Initial Yayoi spread.

Since 2002, a research group at the National Museum of Japanese History has been intensively dating materials from Early Yayoi through Middle Yayoi using the radiocarbon dating method. From the results of this work it now appears that the Yayoi period began as far back as the 10th century BC. This has in turn brought pressure to bear on the matter of iron implements in Initial and Early Yayoi. As a result of examining the circumstances of the excavation of these iron implements, the author has had no option but to conclude that all of these Initial and Early Yayoi iron implements were mixed in with iron implements from a later period, leading to the conclusion that iron implements did not exist during Initial and Early Yayoi.

Yayoi period iron implements began with cast items. Axes, chisels and scapulae made from reworking cast iron axe pieces go back to the period from the beginning of Middle Yayoi through to the end of Middle Yayoi. This situation continued up until the end of Middle Yayoi. The cast iron axes have two raised bands and are in the Yan style, a state that existed in China's Warring States period. Since bronze coins, which are highly indicative of the Yan culture, had not come to Kyushu or Honshu, it is conceivable that most of the cast iron adzes did not start out as complete items but were brought in pieces. As bronze implements also began to become common in the same period, these iron implements were probably brought from the southwest of the Korean peninsula with bronze implements and the materials used to make them.

Forged iron implements appeared at the end of Middle Yayoi. In light of the discovery of examples of forged relics from the end of Middle Yayoi in Fukuoka, Hiroshima and Okayama, it is likely that from around this time people obtained iron materials and forged them to make products. Writings contained in the *Weizhi*, add weight to the theory that in the Yayoi period and the first half of the Kofun period iron materials were brought to Japan from the south of the Korean peninsula. Although during Late Yayoi, stone implements disappeared completely from the Japanese archipelago and iron implements became widespread, the question of whether it is acceptable to believe that all of these were supplied from the southern part of the Korean peninsula remains unresolved.